2017年9月17日

中原キリスト教会

**「ナオミとルツ」**

聖書箇所：ルツ記4:9-17

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

　今日はルツ記を読みます。ルツ記というのは4章しかない文書で、曾てヨシュアに率いられたイスラエル民族生成期の記事である士師記と、イスラエル歴史書の最初第一サムエル記との間に収められている文書です。このルツ記の1:1に「さばきつかさが治めていたころ」とあり、士師の時代のことだと言っています。しかし、ユダヤ人の使用している聖書では詩編、ヨブ記等の「諸書」という分類のなかの一つとされ後ろの方に入っています。内容的に見て信仰深い異邦人の女性の物語り、ということから、聖書の教えに関する諸々の文書の一つ、とされた訳です。成立時期については、定説はありませんが、1:1に士師の時代と言われていますので、本伝承の成立は士師の時代としておきましょう。士師の時代、当初は、イスラエルはモアブ人に従属的関係にあり、おおむね良好な関係にありましたが、後には敵対関係になっています。したがって、すくなくとも伝承の成立は士師記の最初の方、といえるでしょう。モアブ人というのは創世記によればアブラハムの甥ロトの姉娘が子供を得るため父と寝て生まれた子、ということになっています。また、末娘が父によって得た子がベン・アミ別名アンモンです。モアブ人は死海の東の地域に住んでいました。アンモン人は死海の東北地方に住みつきました。したがって、これらの人々はアブラハムの親類縁者ですから、血統で考えればイスラエルの親戚です。しかし、イスラエルの創成過程のなかでイスラエルの宿敵になっていきます。士師記のなかでモアブ人は「左手のエフデ」の宿敵です。モアブ王エグロンを士師エフデが剣をもって殺害し、イスラエルはエドム人の支配を逃れたと記されています。新約時代はぺレアと呼ばれ、イエス様の伝道が行われましたが、異教の地として描かれています。

　まず物語の出だしは次のようなものです。“ユダの地ベツレヘムに居たエリメレクとナオミの夫婦はマフロンとキルヨンという二人の息子がいました。あるとき、その地に飢饉があったため、一家はモアブの地に逃れました。そこは小麦・大麦のとれる屈指の農業地帯であったようです。そこで二人の息子はモアブ人の女性を嫁にもらいました。しかし、まずナオミの夫エリメレク、ついで二人の息子がつぎつぎと死にました。女だけとなった家庭はその地で生きていけませんのでユダの地に帰ることになりました。その時、ナオミは嫁二人に、実家に帰って、再婚し、子供を得、平和な暮らしを得なさい、と勧めます。長男マフロンの妻がルツ、次男キルヨンの妻がオルパです。二人ともナオミと別れるのを嫌がりますが、オルパの方は勧め通り、実家に帰ります。しかし、兄嫁のルツはナオミといっしょに行かせてください、と懇願します。16-17節には「ルツは言った。「あなたを捨て、あなたから別れて帰るように、私にしむけないでください。あなたの行かれる所へ私も行き、あなたの住まれる所に私も住みます。あなたの民は私の民、あなたの神は私の神です。 17 あなたの死なれる所で私は死に、そこに葬られたいのです。もし死によっても私があなたから離れるようなことがあったら、主が幾重にも私を罰してくださるように。」と記されています。モアブ人の主神はケモシュです。これは軍神で、人身犠牲もあったようです。また女神アシュタロテも崇められており、こちらは豊饒神です。ルツも嫁に来る前はこれらの神々を拝んでいたでしょうが、エリメレクとナオミの所に来てからはイスラエルの主なる神への礼拝をしていたと思われます。ナオミに対し、「あなたの神は私の神です」と言っています。このナオミ夫婦はイスラエル信仰の正統派部族であるユダ族の子孫です。また「主が幾重にも私を罰してくださるように」というのは堅い誓いの定型句です。「神かけて誓う」ということです。ナオミはルツをつれてベツレヘムに帰ります。大麦の刈り入れの始まったころベツレヘムに着いた、と言われています。

　この大麦の刈り入れの始めがペンテコステの頃です。ユダヤ人はこのペンテコステの祭りの時、ルツ記を朗読することになっています。ペンテコステとは50日の意味のギリシャ語ですが、出エジプトを記念する過越しの祭り、またの名を種入れぬパンの祭りの50日後の七週の祭りのことです。ヘブル語ではシャブオットです。「初穂の祭り」とか「刈り入れの祭り」とも言われユダヤ人三大祭の一つです。キリスト者にとっては聖霊降臨祭です。太陽暦では5月の末頃です。出エジプトとの関連ではこの日にモーセが神様より十戒を含む「律法」を頂いた、ということになっているため、夜を徹して、律法の学びや祈りをする、とのことです。また成人となったユダヤ人の子どもがユダヤ教に忠誠を示す儀式である堅信礼を行う日でもあります。また伝説ではダビデが生まれた日でもあり死んだ日でもあるとされています。ルツはダビデの曾祖母ということになりますから、この伝説はルツ記に源を発しているのであろう、と思います。この祭りはユダヤ人にとっては楽しい祭りです。そのなかで異邦人ルツの主なる神への信仰深い物語が読まれる、という訳です。旧約聖書における主なる神への信仰の在り方をみると、選ばれた民イスラエルの民族宗教的傾向と、全知全能の神ですべてがその支配下にあるという異邦人への開放的傾向との両面がみられます。民族的傾向は時に異邦人への敵対的姿勢を生み出します。これに対し、開放的傾向は創世記、ヨブ記、エステル記等に見られますが、このルツ記もその流れのなかの一つと言って良いでしょう。

　ナオミとルツは二人でユダの地に戻ってきましたが、生活の手立てはありません。ルツが落穂ひろいをすることによって食べ物を集めました。イスラエルでは刈り入れをするとき地に落ちたくずの穂は貧しい人のためにそのままにしておくことになっていましたのでルツはその落穂を集め自分とナオミの食糧としたのです。二人とも寡（やもめ）になってしまったのです。聖書で寡（やもめ）というのは貧しい人の典型みたいに引き合いに出されています。今では母子家庭が経済的に最も苦しい人たちとおもいますが、ナオミ、ルツの場合、子供はいませんが、当時女性がまともに稼ぐことなどできませんから、今で言えばホームレスの女二人、と言ったところだったのではないかと考えられます。落穂ひろいについてはフランスの画家ミレーの「落穂ひろい」の絵が有名ですね。そのルツが落穂ひろいをしたのが、ナオミの夫エリメレクの一族に属するボアズの畑でした。ボアズは収穫をしている人々にルツが沢山拾えるようにしてやりました。そして14節では「食事のとき、ボアズは彼女に言った。「ここに来て、このパンを食べ、あなたのパン切れを酢に浸しなさい。」彼女が刈る者たちのそばにすわったので、彼は炒（い）り麦を彼女に取ってやった。彼女はそれを食べ、十分食べて、余りを残しておいた」と書かれています。「パン切れを酢に浸す」と言われています。「酢」というのは酸っぱくなった葡萄酒でこれに少量の油を混ぜたものということです。暑い時には、渇きを癒し、食欲を増進させるのによかったそうです。特別待遇です。あきらかに、親戚の妻、という事以上の扱いです。好意を感じていたのでしょう。なお「残しておいた」ものは18節でナオミに差し上げています。

これまでのところで、イスラエルの神の呼び方で注意すべき表現があります。1:20で帰国したナオミはその地の女たちに「私をナオミと呼ばないで、マラと呼んでください。全能者が私をひどい苦しみに会わせたのですから」と言っています。ナオミというのは「快い」とか「愉（たの）しみ」の意味ですが、「マラ」というのは「苦しみ」の意味です。神が自分をひどい苦しみにあわせたのです、と言っています。異国の地で夫がなくなり、跡継ぎの息子2人もなくなったのですから、女性としては塗炭の苦しみに直面したといえるでしょう。ここでは神様に対し「全能者」という呼称が使われています。これはヘブル語で「シャダーイ」という単語で、創世記では「エール・シャダーイ」即ち「全能の神」として出てきます。「全能」ということを強調した神様の別称です。またヨブ記等で「全能者」の表現で「全能の神」のことを言っています。この「全能者」に関するヨブの悟りが、彼の信仰復活を齎すのです。「私たちは幸いを神から受けるのだから、わざわいをも受けなければならないではないか」という信仰の回復です。また、“万物を創造され、全能の神の前に私はいと小さき者です“という謙遜をもって使われることばです。良い事も悪い事もすべて神より出たことで、苦しみに耐え抜けば必ず神が祝福を用意してくださる、という堅い信仰心のもとで使われることばです。1:20-21節の日本語訳では、なにか、恨みつらみを言っているようですが、むしろナオミは”この試練は神様が試みとして私に与えたものだ。私は希望を捨てない。“という意味の告白と理解すべきだと思います。もう一か所、2:12でボアズがルツに対し「主があなたのしたことに報いてくださるように。また、あなたがその翼の下に避け所を求めて来たイスラエルの神、主から、豊かな報いがあるように」と言っています。「イスラエルの神」という表現が出てきます。これは旧約聖書では200回以上出てくる表現ですが、ルツ記ではここだけです。ルツ記が士師記の同類と考えますと、士師記には多数出てくる表現ですから、ルツ記では一か所というのも少々不思議です。おそらくルツ記は異邦人であるルツが主なる神への信仰を全うする、という話ですから、「イスラエルの神」という言い方は意図的に避けたのではないでしょうか。「ヤハウェ・エロヒーム」即ち「主なる神」というイスラエルの神に関する定型的表現も全く出てきません。基本的には「主」（ヤハウェ）を使っています。要するにイスラエルの神、ということではなく、神はすべての者の主（アドナーイ）と言うことです。

ナオミはルツがボアズに親切にされているのを聞いて満足します。そしてルツがボアズの妻と成れる可能性があることを直感します。もっともここまで親切にされれば私でも解りそうな気がしますが。そして麦のふるい分けをする日にルツに「体を洗って、油を塗り、晴れ着をまとい、打ち場に下って行くように」言います。その日は収穫の打ち上げのような日でボアズは家に帰らず、畑の脇で夜を過ごすことをナオミは知っていたのです。日本で特別なお祭りの日の男女が結ばれることを認める習慣がありますが、もしかしたら、そのような日だったのかもしれません。ルツはボアズの寝ているところに行って「足のところをまくって、そこに寝た」と書いてあります。夜中にボアズは目をさましてびっくりしました。ここでルツは「私はあなたのはしためルツです。あなたのおおいを広げて、このはしためをおおってください。あなたは買い戻しの権利のある親類ですから」とつつましやかな姿勢を見せます。「あなたのおおいを広げて、このはしためをおおってください」と言っていますから、今流にいえば「私を抱いてください」ということだと思います。この買い戻しの権利のある親類については後にまとめて考えます。これに対し、ボアズは“今晩はここで過ごしなさい。他にあなたを妻とすべき親戚の方がいますが、そのかたがそうするならよし。もしそうしないのであれば私があなたを妻にします”といって翌朝町に行きました。町のお偉いさんの前で、その親戚の人間と決着をつけるためです。

まず、ボアズはその親戚の人物に、以前にナオミの夫エリメレクの土地であったところを、買戻し、エリメレクの土地として復活させてやる気はないか、と聞きます。4:3です。この人物は後で、ルツを妻とすることを要求されますので、エリメレクの先妻の子でルツの夫マフロンとは義理の兄弟かもしれません。その節は新改訳聖書では「そこで、ボアズは、その買い戻しの権利のある親類の人に言った。「モアブの野から帰って来たナオミは、私たちの身内のエリメレクの畑を売ることにしています。」」となっています。エリメレクの土地であったところをナオミが売ろうとしているので買わないか、という問いになっています。ナオミは夫の土地の跡継ぎは全くいなくなり、また困窮していましたので土地を売却するしかない、と考えて居たのでしょう。レビ記25:25に土地は神が与えたものだから誰かがやむをえず売った時は親戚が買い戻さなければならない、と定められていますので、このボアズのアプローチは、自分よりエリメレクに近い親戚のあなたに対し、既に売却されたような状態のこの土地を買い戻すつもりはないか、と問うているのだと理解するなら意味が通じます。とにもかくにも、この親戚は土地を買い戻す、という返事をします。実は、この土地の買戻しやルツを娶るかどうかの箇所は、律法の広がりの理解とか「買戻し」の言葉の理解とも関連し解釈は諸説紛々です。わたしなりに理解し、一つの解釈を採っています。

ボアズはそれなら、エリメレクの名を残すため未亡人のルツも一緒に買わなければならない、と言います。ここでその親戚は、それなら自分は降りる、ボアズが買い戻したらよい、と言って引き下がってしまいます。4:6でその理由を「私には自分のために、その土地を買い戻すことはできません。私自身の相続地をそこなうことになるといけませんから」と言っています。ルツはモアブ人ですから、その子もモアブ人となり、相続地がモアブ人所有となり、主より与えられた嗣業地を異教徒にわたしてしまうことになるかもしれない、と言っているのだと思います。これに対し、ボアズはルツが「主なる神」（ヤハウェ）に対する信仰を堅く持っており、イスラエルの民として子を育てていくことを確信していました。ここでボアズは土地を買い戻すことと、エリメレクの未亡人を娶ることを繋げており、この親戚もそれに抗議をしていません。主眼はルツを妻とするかどうかなのですが理屈として土地の買戻し義務から話して未亡人を娶ることにつなげていく、という方法を採っています。そのため、本当は、土地買戻しが主眼なのではないのだけれど、ルツを妻とする話も同じ「買い戻す」という動詞で語っている、と理解できます。この箇所での結婚は人類学で言うレビラト婚の一種として解釈されてきました。これは申命記25:9に記述がある律法ですが“同居の兄が死んだときその弟は兄嫁を妻とし、子をもうけ兄の名を遺してやらなければならない”というものです。しかし、これは同居の兄弟に対する戒めであり、義理の兄弟にまでその義務が及ぶ、とは書かれていません。従って、ここでの結婚はレビラト婚の事なのかどうかはわかりません。拡大レビラト婚でこの親戚はルツを妻とする義務があったのだと理解するしかありません。また、4:7ではこの親戚がボアズに買い戻し権を譲る証として自分のはきものを脱いだ、ということが語られています。しかし、レビラト婚に関する申命記の記事では、もし兄弟が妻としなければ、その未亡人は結婚してくれない兄弟を軽蔑するため彼の靴を脱がせる、となっています。4:7のように契約成立の証というような話ではないのです。このような律法が儀式化し契約成立の証という慣行が成立していたのかもしれません。

参考までにヨセフスというAD1cのユダヤ人歴史家がいます。彼は『ユダヤ古代誌』という書物を書いており、旧約聖書全体の要約を書いていますが、その中ではこの部分を自分の解釈で、極めて常識的にわかりやすく書いています。そこではこの「買戻し権」のある親戚は「近親者ですので、律法によってそれは合法的にわたしに譲渡されたと思います」と言っています。それに対し、ボアズはそれでは「その土地を手に入れたいと思えば、律法の定めに従って彼女（ルツ）と結婚しなければなりません」と言い、これに対し彼は“私は妻子がいるので遺産の相続と娘との結婚を辞退する”と言っています。解りやすい解釈と言えるかもしれませんが「信仰」の問題を扱う解釈としては貧弱です。

ここで重要なのは「買戻し」という言葉です。ヘブル語で「ゴーエール」と言います。ボアズが土地とルツを買い戻した、ということになっている点が重要なのです。この「ゴーエール」という言葉は主がイスラエルを救い出す時に使われることばなのです。例として出エジプト記6:6を見てみます。「わたしは主である。わたしはあなたがたをエジプトの苦役の下から連れ出し、労役から救い出す。伸ばした腕と大いなるさばきとに、よってあなたがたを贖う」と言われています。主なる神がイスラエルを苦難から救い出すことを「贖う」と言っているのです。これが「ゴーエール」の動詞形「ガーアル」です。何らかの代価を払って主がイスラエルを買い戻すのです。神様がイスラエルの救いのために、犠牲を払うのです。イザヤ書48:17では「あなたを贖う主、イスラエルの聖なる方」と言われています。「買い戻す」「贖う」の意味のこの言葉は単に「救う」の意味でも使用されますがこの言葉の背後には必ず犠牲があります。「神の痛み」というのも神様が払われる「犠牲」です。新約聖書ではルカ1:68でザカリヤが「ほめたたえよ。イスラエルの神である主を。主はその民を顧みて、贖いをなし」と言っています。そしてパウロはロマ書3:24で「ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです」と言い、キリスト・イエスの贖いの業について述べています。ルツ記におけるボアズによる土地とルツの買戻し「ゴーエール」は主なる神によるイスラエルの救いを指し示すものなのです。そしてそれが新約の主イエス・キリストの救いの業にまで繋がっているのです。自らの命を代価とし、罪ある者すべてを贖い、神の前で罪なき者としてくださったあの業にて完結するのです。その意味で、ボアズのルツを買い戻した業は主イエスの業の予型という言い方も許されるかもしれません。

4:9でボアズはナオミの夫エリメレクのすべて、その二人の子のものすべてを買い取り、長男の妻ルツを買って妻とした、と宣言します。そして町の長老たちはボアズに「あなたの家に入る女を、イスラエルの家を建てたラケルとレアのふたりのようにされますように」と祝辞を述べます。ラケルとレアはいずれもイスラエルの祖ヤコブの妻で、イスラエル十二部族のうち八部族の祖を生み事実上、この二人の女性がイスラエルの母という訳です。ルツをそれと同列に置いています。そして12節ではボアズの家は「タマルがユダに生んだベレツの家のようになります」と言います。このベレツはヤコブとレアの間に生まれたユダ即ちユダ族の祖がタマルによって生んだ子です。タマルが子供欲しさに死んだ夫の父ユダに娼婦のまねをして生んだ子です。とにかくユダ族の系譜に入りました。そのあとは、4:18以下の系図の通りでエッサイの子ダビデまで記録されています。この系図の形式はマタイによる福音書にイエス・キリストの系図としてまた出てきます。1:3以降です。そして5節にボアズ、ルツがでてきます。ルツ記4:13-14ではベツレヘムの女たちはナオミに「こうしてボアズはルツをめとり、彼女は彼の妻となった。彼が彼女のところに入ったとき、主は彼女をみごもらせたので、彼女はひとりの男の子を産んだ。 14 女たちはナオミに言った。「イスラエルで、その名が伝えられるよう、きょう、買い戻す者をあなたに与えて、あなたの跡を絶やさなかった主が、ほめたたえられますように」と言っています。そしてここで、ナオミに対し「買い戻す者をあなたに与えて」と言われています。この買い戻す者はその男の子のことでオベデと名付けられています。オベデが「ゴーエール」でありイスラエルを救う者になるのです。これは後にイザヤの預言でイスラエルを救うみどりごが生まれる、とされたことに対応しています。二人の「ゴーエール」がルツ記には描かれていることになります。このオベデこそ主イエスの予型というにふさわしいでしょう。オベデは「仕える者」の意味です。系図によればオベデはダビデの祖父ということになります。ちなみに名前の意味するところを申し上げますと、ナオミ夫エリメレクは「私の神は王である」という意味です。ルツは「友情」とか「潤い」の意味。欧米人ではルツは女の子の名前ではpopular。ベーブ・ルースのように苗字にもなっているようです。ナオミの次男の妻「オルパ」は「髪の豊かな女性」ないしは「雌じか」の意味。雅歌に出てきます。ボアズというのは「彼の内に力がある」とか「敏速」の意味。

　最後の方の15節でやはりベツレヘムの女たちはナオミに対し次のように言っています。「その子は、あなたを元気づけ、あなたの老後をみとるでしょう。あなたを愛し、七人の息子にもまさるあなたの嫁が、その子を産んだのですから」。七人の息子とは多くの息子の意味です。息子はなくなったけれども沢山の息子以上の嫁が孫を産んでくれた、という祝福の言葉が与えられています。本日のお話の最初の方でナオミが「全能者から与えられた苦悩」について述べていましたが、このルツ記の最後のナオミへの祝福はその苦悩と対照されるものです。苦難が祝福へと変えられたのです。ルツ記はもちろん異邦人ルツが主なる神への信仰を貫きモアブによる救いを受ける、という物語であるのですがもう一本ナオミの線がずっと走っていることも忘れてはなりません。神により試みられたナオミが愛する嫁を通して、孫を得るという幸いを得るのです。それも、イスラエルを贖う者となる「ゴーエール」となる方をです。祈ります。

（ご在天の父なる御神様、今日はルツ記の中から学びました。異邦人のルツが主なる神への信仰に留まり、ボアズの妻として、主イエス・キリストの祖先の母となる物語りを見ました。イスラエルの信仰が我々異邦人の主なる神となることを旧約の中に示して下さいました。また、ボアズとその子オベデという二人の「ゴーエール」を通して、真の、最終的な贖い主イエス・キリストの姿が旧約の中にあることを示して下さいました。私たちを新しきイスラエルとして受け入れてください。救い主、我らの主イエス・キリストのみ名によって祈ります。）